

さあ、これからどうする！【第 2 号】

私たちは（稚内市）どこで風車の乱立計画を許してしまったのでしょうか。

3つの海に囲まれている稚内市は、大変風光明媚なところで、利尻礼文サロベツ国立公園が指定された1974年以前にも多くの観光客が訪れ、離島に渡ったり、日本最北端の地を訪れていました。

現在、このような地域に事業者により風車の立地計画が提出され、既存の84基に多数が上乘せされようとしています。誰も止めようがないのでしょうか？

その原初とも思われるような契機の一つを、平成14年に稚内新エネルギー研究会より発行された「レラタウンわっかない 風のまち稚内」に垣間見ることができます。

「風」とともに暮らす宗谷の人々の紹介に加え、宗谷岬ウインドファーム計画、研究会会長、長谷川氏のインタビュー「自然エネルギーからの街づくり」が載っています。

研究会はその後市が進める『稚内市次世代エネルギー』推進の一翼を担ってゆくことになるのです。

政策は検証されてこそ生きてくるものです。稚内市次世代エネルギー政策が現在どのような形であるのかわかりませんが、わが街の問題として知ることが可能であればいいのですが、、、

ここに一文を紹介します。ネットで偶然知ったブログですが宗谷への思いと、風車乱立計画批判が込められています。

北海道MY LOVE 2014年12月3日

稚内など3市町で国内最大級の風力発電施設建設を目指す道北エナジー社(稚内)が仮称・道北中央発電施設の「環境影響評価 方法書」の閲覧を開始した。

前段階の「計画段階環境配慮書」では2カ所としていた事業を6ヶ所に分類した。経済産業大臣から指摘されていた野鳥の保護などを取り入れた部分もある。

方法書によると、計画されているのは①増幌②勇知③川西・川南④芦川・豊富山一の各施設である。

6カ所を合計すると出力は29～63満kwで、発電機は145～251基、総面積は稚内市、豊富町、幌延町の8000ヘクタール以上に及ぶ。

風車の出力は2000～3200kwで羽の直径は80～115メートル、風車の高さは120～160メートルと巨大風車となる。

計画地の一帯は、周水河地形の宗谷丘陵、サロベツ原野、大沼、メグマ沼などの自然豊かな景勝が広がる地帯である。いくら北海道の北の果てとはいえ、これだけ広大な面積ともなれば無人ということはない。6事業とも、人家に隣接し、500メートル以内という例もある。もちろん2キロ圏には学校、保育所、老人ホーム、病院などもある。

とりわけ、豊富温泉という温泉施設は事業区域から600メートルしか離れていない。お湯に原油が混じって噴出するという全国的にも珍しい温泉だ。皮膚アレルギーの方の湯治場として利用されていて、治療のために移住する人もいるというほどの温泉なのである。こうした湯治場の近くで直径120メートルのローターが時速300キロで回転してごう音を立てた場合、アレルギー患者の皆さんに影響は出ないか、とても気になるところである。

さらに事業が計画されている地帯は、オジロワシやオオワシなどの猛禽類が飛来し、ガンやカモ、ハクチョウなどの重要な渡りルートに位置している。風車への衝突(バードストライク)が心配されている。

また、湖沼や湿原、丘陵といった自然度の高い地形でフットパスとか自然公園などが多数、整備されている。高い風車が林立することで、耳への騒音の影響だけでなく視覚的にも圧迫感が懸念され、自然ツアーなどの利用を低減させる恐れが高い。

これらの懸念に対して、道北エネルギー社は今回の方法書で「配慮書よりも具体的な対策をしめした」としている。しかしながら、人間に対する騒音や野鳥のバードストライクに対しては「回避・低減するよう配慮する」などのオンパレードで、とても具体的とは言えない。

また自然景観の影響に対しては「風車が新たな観光資源となる」的な記述もあり、何をか況や、というしかない。

なお、この「仮称・道北中央風力発電事業」の周辺ではすでに5カ所で計74基の風車がある。道北エネルギー社が計画のフルで251基を立てたならば、計325基となる。それこそ稚内や豊富の人は、どちらを向いても風車、風車、風車、風車・・・という事態で、それで「風車のある魅力的な景観」などと言えるのであろうか？

(以降、省略)